

2018 年 11 月 4 日（日）「見える人の盲目」

マタイ 20:29-34

29 彼らがエリコを出て行くと、大ぜいの群衆がイエスについて行った。30 すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」31 そこで、群衆は彼らを黙らせようとして、たしなめたが、彼らはますます、「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ」と叫び立てた。32 すると、イエスは立ち止まって、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」33 彼らはイエスに言った。「主よ。この目をあけていただきたいのです。」34 イエスはかわいそうに思って、彼らの目にさわられた。すると、すぐさま彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

【序論】

福音書にはしばしば盲人の癒しの記事が出てきます。カペナウムの盲人（マタイ 9:27-31）、ベツサイダの盲人（マルコ 8:22-26）、シロアムの池の盲人（ヨハネ 9 章）、そしてエリコの盲人（マタイ 20:29-34、マルコ 10:46-52、ルカ 18:35-43）です。それぞれの記事に特徴があり、置かれている文脈によって意味が異なります。今日の「エリコの盲人」の記事は、主イエスがエルサレムに入城する直前に置かれている。そして、28 節で「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです」と言われていた直後に今日の記事が登場する。つまり、一人の（あるいは二人の）盲人のために命をささげ給う主イエスの姿が垣間見られることになるでしょう。

【本論】

本論 1. エリコの町

彼らがエリコを出て行くと、大ぜいの群衆がイエスについて行った。（20:29）

「エリコ」という地名が出てきますが、これはヨルダン川の西約 8 km、エルサレムの南東約 24km に位置する非常に古い町です。パレスチナ最古の町と言われ、



新石器時代（紀元前 7000～5000 年）にできたと推定されています。エリコの町が聖書中最初に登場するのはヨシュア記 5～6 章で、イスラエルの民がカナンの地に帰還したとき、陥落させた第一の町として知られています。この町は、主イエスの時代にはほとんどが崩壊していましたが、ヘロデ大王はその南部に新しい「エリコの町」を築き、「冬の離宮」を建て、ヘレニズム・ローマ風の都市を建設し、後方の丘には要塞をめぐらし、円形劇場や競馬場まで設けました。ローマの軍隊もそこに駐屯していましたから、エリコは当時、政治的にも軍事的にも重要な都市だったのです。地形的にも面白く、海面下 250m と低いところに位置し、それに対してエルサレムは海拔 800m でありましたから、まさしく都に「上る」という表現がピッタリきます。エリコに来たということは、主イエス一行にとって巡礼の最終段階に入ったということ。つまり、主イエスがこれから架かろうとしている十字架の意味、「苦難のしもべ」としてのイエスを、弟子たちはよくよく理解して臨まなくてはならない、そういう局面に来ていたのです。

「**大ぜいの群衆**」というのは、同じく過越の祭の巡礼のためにエルサレムへ向かっている人々で、主イエスと同行を共にしていた一団でありましょう。

本論 2. 二人の盲人

すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」(20:30)

さて、ここに「**ふたりの盲人**」が登場します。実際に二人いたのか、それともマタイ独特の「人数の倍加」による表現なのかは分かりません¹。マルコは「バルテマイ」という名前の一人の盲人をここに登場させています（マルコ 10:46）。仮に二人いたとしますと、バルテマイは後のキリスト教会の重要なメンバーとなり、もう一人は霞んでしま

¹ 「人数の倍加」について

「著者マタイは、幾つかの箇所では本来一人であった出来事を敢えて『二人』として読者に伝える技法を使っていることが分かります。具体例として、9:27-31、20:30-34 では『二人の盲人』が登場するのですが、並行記事であるマルコ 10:46-52、ルカ 18:35-43 では盲人は一人とされています。他にも、21:1 に登場する驢馬の数も二頭ですし、26:60 の主イエスの裁判の場面でも二人の証人が登場します。このように、マタイは『二人』にこだわるのですが、それはユダヤの律法の『証人は二人いなくてはならない』という規定を反映したものであると思われます（申命記 17:6、Ⅱコリント 13:1）。イエスのメシヤ性を読者であるユダヤ人に伝えるため、マタイは敢えて『二人』としているようなのです。これは事実の歪曲というよりも、説得技法、弁証法として有効であったようです。」(No. 79 マタイ 8:28-34 の説教より)

ったのでしょう。いずれにせよ、この二人は目が開かれるという人生が大逆転する癒しの御業にあずかりました。

私たち健常者には全盲の方々の気持ちはどうしても分からない面があります。いえ、分かっているのです。時々白い杖をついて一人で歩いておられる方を見かけますが、その方が何を思い、何を聞き、何を感じていらっしゃるか、考えてみたことがあるでしょうか。彼らは恐らく、目の見える者には聞こえない音を聞き、感じ得ないことを感じ、見えないものを見ているのでしょう。

昔、多摩ニュータウンキリスト教会で、歌手デビューをされて間もない頃の新垣勉さんをお招きしました。礼拝の中での特別賛美と、午後のコンサートがあり、愛餐会も共にしました。私は当時小学3年生くらいでしたが、全盲の人を間近に見るのは初めてのことで、子どもながらに言い難い感慨を覚えたものです。とりわけ、愛餐の席で、誰かがよそってきてくれた食事を食べておられる姿は忘れられません。平皿に乗せられた料理がとにかく食べにくそうなのです。顔をお皿に近づけなくては食べることができない。深皿や茶碗のようなものだったら、もっと食べやすいのではないか…そんなことを考えながらジッと見ておりました。目が見える人には、見えない人の「必要」がなかなか分かりません。私たちが当たり前にやっていることが、彼らにとっては当たり前ではない。私たちが常識として語ることが、彼らには常識ではないかも知れません。そして、私たちが知らない世界を彼らは知っているのでしょう。

パレスチナは乾燥地帯ですから、砂嵐によって失明する人が多かったそうです。エルサレム付近には多くの盲人がいたと言われていますが、それは身体障害者が家にいると「罪の結果だ」と偏見を持たれる風潮があったため、親から捨てられるケースが多かったからです。身寄りをなくし、職を得ようにも得られない彼らは、施しに頼って生きていくほかはありませんでした。エルサレムには時期によって多くの巡礼者が訪れますので、その道に座って待機し、施しを求めるのは、彼らにとってこの上ないチャンスだったのです。

そこに主イエスの一団が通りかかりました。彼らはどこから「ナザレのイエスを通る」という噂を耳にしたのでしょうか。千載一遇のチャンスとばかりに叫び始めました。「**主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ**」。これは施しを求める言葉ではありません。自分の低い身分を認め、憐れみを求めたのです。「**ダビデの子**」という呼び方は、来たるべきメシヤを指す称号。彼らがこの呼び名を知っていたということ自体が驚きです。そして、このように呼ぶところに彼らの信仰告白がある。肉体的な解放を与えることのできる王と信じ、救いを求めたのです。

本論 3. 霊的盲人なる群衆

そこで、群衆は彼らを黙らせようとして、たしなめたが、彼らはますます、「主よ。私たちがあわれんでください。ダビデの子よ」と叫び立てた。(20:31)

主イエスに付き従っていた群衆は（弟子も含まれるでしょう）、エルサレムに向かう主イエスの威容にただならぬ雰囲気を感じていた。また、主イエスの話を聞き、その恵みの言葉に耳を傾けていたかった。それを妨げるかのように盲人が叫び出したのです。「身勝手な奴だ!」「黙れ! あっちへ行け!」とたしなめるが、その盲人はもっと大きな声で叫び続ける。誰にも止めることができない。このしつこさ。非常識さ。いかがでしょうか。私たちは周りの人に止められると、すぐに気持ちがしぼんでしまって、更に何かを求めるということはなかなかできないのではないのでしょうか。しかし、主イエスはこのような非常識とも言える行動の内に信仰を見て取られるのです。

屋根を剥いで中風の男を吊り降ろしてきた4人の友人（マルコ 2:1-12）。スロ・フェニキヤの女（マタイ 15:21-28）。客人をもてなしもしないで主の側で話に聞き入るマリヤ（ルカ 10:38-42）。どれを取っても非常識に見える行ないばかりですが、主はどのように捨て身でぶつかって来る人を愛し、信仰を見出されるのです。今回も同様でした。盲人の叫びは主の心を動かしたのです。

それに対し、この叫びを止めようとする群衆は、どこかの誰かに似ていませんか。そうです、子どもが連れて来られた時に叱りつけた弟子たちの行動とよく似ているのです（マタイ 19:13）。彼らは確かに善意からそのようにしたのでしょう。先生を煩わせたくないという一心でそのように行動したと思われます。しかし、彼らには見えていないものがあつた。それは、盲人の信仰です。盲人の心の叫びです。盲人が長年負ってきたとてつもない苦悩です。群衆はその意味で盲目であつた。人の心の問題、霊の問題に気づくことができない。人の苦悩が見えない。それは私たちの姿そのものなのかも知れません。

本論 4. 主の憐れみ

すると、イエスは立ち止まって、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」
(20:32)

多くの人が盲人を疎む中にあって、主の霊の目は鮮やかに開かれていました。主は盲人の内に信仰を見出されたのです。「わたしに何をしてほしいのか」。主は盲人が何を求めているのか、言わずもがな分かっていたはずです。しかし、あくまでも彼ら自身の口を通

してそれを表現させる必要がありました。私たちの祈りは具体的でしょうか。漠然とした祈りばかりであったとしたら、本当にそれが主の心に届いていると確信を持って言えるでしょうか。

彼らはイエスに言った。「主よ。この目をあけていただきたいのです。」(20:33)

明快です。彼らは自分たちにとって最も必要なものが何であるかを知っていた。そして、それを求めるべき相手も知っていました。信仰が先立ち、自分の問題にも目が開かれていたのです。

肉体的に目が開かれている人は、かえって自分の問題が見えていないのかも知れません。特に、自分の霊の問題が見えない。自分が本当に求めるべきものが分からない。どう祈ってよいのかも分からない。それが私たちの盲目の本質ではないでしょうか。

イエスはかわいそうに思って、彼らの目にさわられた。すると、すぐさま彼らは見えるようになり、イエスについて行った。(20:34)

「かわいそう」という訳では弱すぎる言葉が原文では使われています(σπλαγχνισθεῖς)。これは、はらわたが揺り動かされるような、「自分の体を切り刻むほどの痛切な思いやりに満ちた言葉」です。主は盲人の人生全体を見て取られた。彼らの心の叫びを聞き取られた。主はその「目」にふれられたとあります。この「目」(ὁφθαλμός)という言葉は特殊な用語で、「心の目」「知る能力」を表す詩的な表現なのです。彼らは単に肉体の目が開かれただけでなく、霊の目が開かれたのです。目が開かれた彼らは何を見たのでしょうか。まず、優しき主の御顔を仰ぎ見たことでしょう。そして、「**イエスについて行った**」のであれば、ゴルゴタの丘で十字架につけられる御姿をも見たことでしょう。彼らは、その死が他ならぬ自分のためであることを悟ったのでしょうか。

【結論】

私たちは自分が「見えている」と思っているかも知れません。肉体的に見えることはありがたいことです。しかし、その当たり前のことにすら気づいていないとすれば、そこには盲目があるのではないのでしょうか。私たちの霊の目は開かれているか。もしかしたら、「開かれている」と思っている裏側には、「あの人、この人は開かれていない」という高ぶりが隠されているのではないか。私たちはまず自分が「何も見えない」者であることを知らなくてはなりません。そして、主イエスにこの霊の目を開いてくださるよう、魂の叫びを挙げたいのです。

【祈り】

見えるものも、見えないものをもご覧になる天の父なる神様。私たち人間にはまことに物事のごく一部しか見えておりません。自分自身のことさえ十分には分かっていないのです。ましてや、隣人のことなどどれほど知っているでしょうか。その瞳の奥に隠された悲しみや訴え、心の奥底に眠る真実に私たちは気づかずに生きています。そして、魂の問題、永遠の問題となりますと、見ること自体を無意識に恐れているかも知れません。すべてを知られる神よ。私たちを憐れんでください。私たちも見えるようになりたいのです。エリコの盲人の目を開き給うた主イエス・キリストの御名によって祈ります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

見える者にも見えない者にも、等しく救いを求める心を与え給う、父なる神の愛。

捨て身で神に近づく者を喜び、受け入れ給いし、主イエス・キリストの恵み。

自らの盲目性に気づかせ、真の開眼へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。